

世界の金融を支配するといわれるロスチャイルド家。経済はもちろんのこと、芸術支援やチャリティまで、ロスチャイルド家なくして今の国際社会は成り立たない。そんな大富豪ロスチャイルド家ではクリスマスをどう過ごすのだろうか。イギリス分家の令嬢シャーロット・ドウ・ロスチャイルドさんにその思い出を語ってもらった。

# ロスチャイルド家の 最も大切な一日

美しい冬景色のエクスペリー・ガーデンズ。奥に見えるのがロスチャイルド家が1919年に購入した館エクスペリー・ハウス。

Kristmas Celebration  
イギリスのクリスマス



シャーロット・ドゥ・ロスチャイルド。イギリス・ロスチャイルド家、元ロスチャイルド銀行頭取・イギリス屈指の園芸専門家として有名な故エドモンドさんの末娘。ザルツブルグ音楽院、英王立音楽院卒、ソプラノ歌手。日本をはじめ世界各国でコンサート活動中。

右上：シャーロットさんの母君エリザベスさん。オーストリア人で、社交界の花形だった。／左上：シャーロットさんと双子の弟ライオネルさんの幼少期。／左下：お母さんの膝に抱かれる双子の姉弟。

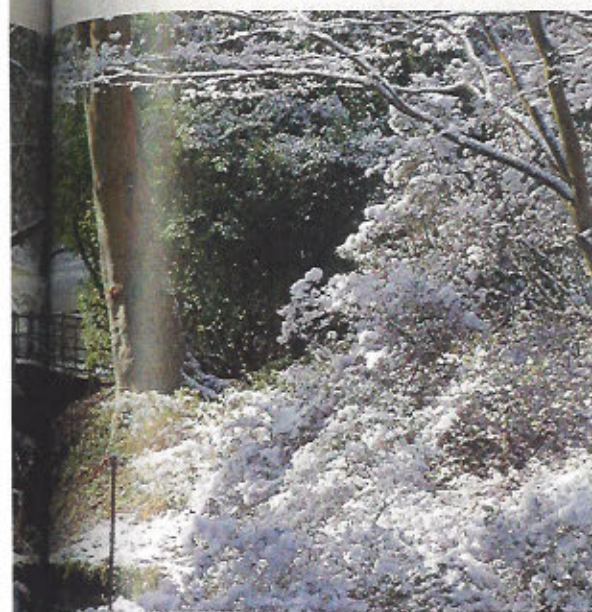
“モミの木がホールに運ばれると館いっぱい森の香りが満ちて期待で胸が高まります”

私は今、南イングランドのハンブシャー州、ロスチャイルド家の領地エクスペリーに住んでいます。今は一般公開されているエクスペリー・ガーデンズは、1919年以来、祖父と父が熱心に創り上げた広大な庭園で、シヤクナゲとツツジのコレクションで世界的に有名です。花が咲き乱れる春は最高に美しいのですが、私は12月のエクスペリーも大好き。今は亡き父母と共に過ごした温かいクリスマス思い出があるからです。

12月の声をきくと、庭師はどこからか背の高いモミの木を根こそぎ掘り起こし、巨大なシートに包んで玄関ホールに運び込みます。すると森の香りが館いっぱいになり、期待で胸が高まります。やがて大きな鉢にツリーを入れ、母と共に飾り付けをします。オーストリア生まれの母はモミの木やヒイラギを愛し、フラワー担当のオードリーと一緒に館中を美しく飾りました。

クリスマスの準備はわくわくするものです。中でも、母がザルツブルグのクリスマス市で買った天使の飾りのグロツケンシュピールの箱を開ける時はドキドキしました。ろうそくに火を灯すと、その熱で天秤の両側についた金色の天使がぐるぐる回り始め、回る度にベルに触り、素敵な音を奏でるのです。

館の飾り付けがひと段落する頃、広大な庭も白銀の冬化粧に。12月6日には敷地内の教会の聖歌隊が牧師と一緒に来て、ツリーの前でキャロルを歌います。合唱が終わると両親は彼らを労い、シナモンやクローブの香りが濃厚な温かいモルドワイン、熱々のソーセージロールにミンスパイ、甘いチョコレート・エクレアを振る舞いました。この伝統は今も姉の館で引き継いでいます。



左：幼い頃のシャーロットさん（左）と双子の弟ライオネルさん。サンタさんのお膝の上で記念撮影。  
右：幼いシャーロットさん。小さな可愛い帽子がお気に入り。

## “イブの夕方、館の居間では スタッフたちのためにパーティーが 開かれます”

イブの朝は、どんな天気でも家族全員、領地散策と決まっていた。父と兄弟は森の奥でキジを撃ちました。その後、庭の北にある東屋に集合、薪が勢いよく燃える暖炉の前でシチューにポテトのピクニックランチ。食後、午後3時には必ずラジオをつけ、ケンブリッジ大学のキングス・カレッジ聖歌隊の清らかな賛美歌『ダビデの村に (Once in Royal David's City)』に耳を傾けます。

とつぷりと陽が落ちる夕方5時半、館の居間でスタッフのためのパーティーを開きます。母は一人一人のために、心を込めてブレゼントを選んだものです。パトライ、メイドたち、料理人たちに、衣類やポトワインなどの酒類のほか、全員にもれなくキジを2羽ずつ贈る習わしでした。私たち子供の面倒を見てくれるスコットランド出身のナニー、ジュネット・サムスにも、母はカーディガンやショール、ハンドバッグなどを贈りました。私はナニーから真っ黒なスコッチ・テリアの子犬をブレゼントされたのを覚えています。

私たちが寝る時間に父は「おりこうな子には今晚、サンタさんがストッキングに何か入れてくれる」と言いました。サンタさんは夜遅くに煙突から入ってくるので、寝る前に父と一緒に暖炉の前にビスケットとグラス一杯のシェリー酒を置きます。翌朝、グラスは決まって空っぽでした。

枕元には父の狩猟用のストッキングを片方だけ置きます。私は、ブレゼントがもらえるほどおりこうだったかしらと思いを巡らせ、興奮して眠れません。夜中に何かの気配がしたら目を覚まし、すぐに暗闇の中でストッキ



上：エクスベリーの雪景色。父エドモンドさんはシャクナゲの新種開発に力を入れ、中には「シャーロット」という品種もある。右に見えるのはジャパニーズ・ブリッジ。左：シャーロットさんが今も室のように大切にしている思い出のクリスマスの飾り。天秤の先にはそれぞれ天使が飛んでいる。



ソプラノ歌手シャーロット・ドゥ・ロスチャイルドによるクリスマスCD「クリスマス・ロロバイ（クリスマスの子守唄の意味）」ニンバス・レコード。写真左はダニエル・ベレット・ハーブ奏者。

ングを触りました。空っぽだったはずが、いろいろなものが入ってゴロゴロした感触、手をつつこんで何だろうと、ちよつと触ってから、また寝たものです。

翌朝はストッキングを持って両親のベッドによじ登り、双子の弟ライオネルたちと一緒に中を開けます。お茶目な父は母にもストッキングを用意し、中に石炭一個を入れておいて母をがっかりさせます。母は毎年わかつていても「がっかり顔」。そこで父がすかさずシャネルのパックや香水をプレゼントするという趣向。はじけるような笑いが絶えない朝でした。

クリスマスの食卓には、家族のほかに、親戚や音楽家の友人たちも毎年集います。我が家の伝統の一つとしてパトラーのリチャーズが、毎年「ユージュアル・ライプ・ブディング（いつもの生きたブディング）」をシェフと一緒に考案、銀蓋のついた銀皿で持ってきます。リチャーズが蓋を開けると、中から生きたスナネズミがひよつこり顔を出すのです！年に1回、パトラーに許される悪ふざけです。ターキーの丸焼き、ロースト・ポテトに芽キャベツ、デザートはブランデーバター付きクリスマス・ブディングと、お腹いっぱい食べたなら、敷地内の海辺まで散歩です。

時代は変わり、父も母も他界し、今ではナニーやパトラーも姿を消し、館でクリスマスを祝うこともなくなりました。兄弟姉妹は互いにクリスマスの挨拶を交わした後は、敷地内にあるそれぞれの家でお祝いをします。でも、今も海まで散歩すると、ワイト島の島影がああ頃と変わらない様子で冬の海に浮かぶのが見えます。クリスマスの祝福もまた、あの頃と変わらないのです。